

特別展関連 シリーズ講座 第 1 回

時代を動かした讃岐びとたち ～古代讃岐のポテンシャル～

渋谷 啓一

- 1 特別展「讃岐びと、時代を動かす—地方豪族が見た古代世界—」について
- 2 時代を動かした讃岐びとたち
- 3 古代讃岐の潜在力について
- 4 おわりに

1 特別展「讃岐びと、時代を動かす—地方豪族が見た古代世界—」について

(1) 「古代の讃岐」がもつイメージ

- ・「古代」のイメージは？
- ・今回の展覧会の対象とする年代＝7～12 世紀
- ・讃岐国のイメージは？

菅原道真「寒早十首」：「何の人にか寒は早き、寒は早し・・・の人」（史料 1）

(2) 従来の理解（反省をこめて…）

- ・文献資料の偏差から、地域の歴史叙述が空洞化（→イメージが薄い要因）
→中央、政権からの目線での歴史叙述になってしまう
- ・「伝統的な有力地方豪族が没落、新興の有力農民が活躍する」イメージ
- ・律令国家から王朝国家へ。律令制の崩壊。有力農民から武士が
- ・「在地首長制」論（石母田正『日本の古代国家』1971 年）の枠組み
（※）本当に？ （例）藤原道長を支えた経済的要因は？
（例）伝統的の有力豪族は没落した？

(3) 展覧会の趣旨

○新しいイメージの讃岐の古代史を提示

- ・主人公＝讃岐各地で地域を支配し経営していた地方豪族たち
最新の文化や制度を吸収し、自らの経営ツールとして使いこなす人々
→地方豪族たちの活躍や、讃岐国がもっていた潜在力を紹介する
- ・現代につながる「地域」が作られた時代を紹介
「地域性」の枠組みが形成された時代として紹介

○キャッチフレーズ

「仰天!! 時代を動かした‘がいな’讃岐びとたち」

2 時代を動かした讃岐びとたち

- ・古代国家の支配の中で、したたかに生き抜き、時代を動かした魅力的な人物を紹介
- ・知られざる讃岐びとたち（「空海、円珍・・・。それだけじゃない、讃岐びと。」）

(1) 舎人国足 <とねりのくにたり>

◎天平 16 年（744 年）「瑜伽師地論」100 卷写経事業

讃岐国山田郡出身。殖田郷（現、高松市東植田町～西植田町）周辺に本拠か？

（参考）長岡京出土木簡「讃岐国山田郡口田郷舎人口／延暦十一年八月七日」

舎人＝天皇や貴族に仕え、警備や雑用に従事。地方出身者は出仕後、郡司や在庁官人に。

「宮号＋舎人」＝大王宮に仕えた舎人

（例）他田舎人→他田宮の大王（＝敏達）に仕えた舎人

→宮号のない舎人：飛鳥に宮が固定された後（舒明以降）に、舎人として出仕

※人物：山田郡出身で宮都に出仕経験のある一族の一人

写経事業 事業プロデュース能力と事業費用を負担できる経済的背景

- ・用紙の調達（継一打一界）
- ・道具の調達（筆・墨・定木・敷紙などなど）
- ・テキストの調達（有力寺院？、貴族の家？）
- ・人の調達（写経生、校生、装幀生、これらの委託先？）
- ・奉納先との交渉（東大寺に奉納？）

経済的地勢：春日川を通じて瀬戸内海、屋島周辺と直結、内陸・山越の交通を把握

政治的地勢：宮都との関係、社会情勢への反応

(2) 田中真人広虫女 <たなかのまひと ひろむしめ>

三木郡の郡司の妻。宝亀 7 年（776 年）死亡

『日本霊異記』に登場する讃岐びと（史料 2）

『日本霊異記』とは？

- ・延暦 6 年（787 年）以降、9 世紀初めに編纂
- ・薬師寺の僧・景戒がまとめた説話集
- ・列島各地の情報を遊行僧らが都の大寺にもたらず
- ・因果応報の論理に引き付けて、採用・編纂

ストーリーから読み取る

- 「富みて貴く宝多し」：馬・牛・奴婢・稲・銭・田・畑を持つ
- 「酒を売る」 → 水で薄めて利益を得る
- 「稲を貸す」 → 出挙（すいこ）。利益を得る

出挙：種籾を貸しつけて、収穫時に利息分を含めて返させる

国家が強制的にする＝公出挙 → 利息分が国衙の経費に。（税目化）

広虫女のような場合＝私出挙 ※原則禁止！

→貸すときは小さい升（7目）、返すときは大きい升（12目）

→高い利子（10倍、100倍）

※収入増 → 次の投資へ

→破産する人続出 → 自己の労働力（奴婢）へ

○寺の動産を使用、返却なし

○死後、遺族が財産を寄進

・財物を三木寺へ

・東大寺へ 牛 70 頭、馬 30 疋、墾田 20 町、稲 4000 束

・それまでの貸付は免除

説話の舞台

三木郡田中郷

三木郡の地勢 : 新川・吉田川流域→低湿地…開発に不向き

流域を挟む南北に、古代の郷は展開

郷（井門、高崗、氷上、田中、井上、池辺、武例、幡羅）

北部＝井門、高崗（?）、井上、池辺 / 南部＝氷上、田中

→南部＝阿讃山脈からの扇状地上。水の確保が必須。田地より牛馬飼育向き？

発掘調査から：「尾端遺跡」木樋の出土（6世紀）、倉庫群の検出

夫の存在＝三木郡大領の小屋県主宮手

伝統的な豪族（県主）、郡司。三木郡北部に勢力をもつか？

宮手と広虫女の婚姻関係：南部と北部の同盟？ 郡司のありかたを示唆

東大寺との結びつき

天平勝宝 4 年（752 年）、讃岐国山田郡宮処郷が東大寺の封戸になる

封戸：戸が負担する調・庸、租の半分などを、封主である寺院などに納める

→山田郡宮処郷 50 戸分の、調・庸、租の半分が国庫ではなく東大寺へ

※ここで登場する東大寺は、宮処郷の封物を集積する現地事務所を指すか

→新興かつ政権に近い権威（東大寺）との結合（広虫女死亡の 24 年前）

瓦の同範関係が物語るつながり

始覚寺と宝寿寺、前田東・中村遺跡 →三木郡北部と山田郡東部＜宮処郷＞

始覚寺と国分尼寺、讃岐国府 →国府と郡、三木寺＝始覚寺

※田中真人広虫女：多角的経営をしていた讃岐びと

→私財を投入した大規模開発、伝統的手法の農業経営（出挙）、

商業、新興中央寺院との結合、国・郡との結合

＝「富豪の輩」（律令国家との対峙）（→次代を担う存在）

伝統的な豪族（小屋県主との婚姻関係、郷名をウジナに）

(3) 「わにべのおみ」：＜讃岐びとの1つの源流＞ 7世紀から9世紀、三野郡の豪族
7世紀の三野郡 → 突如として讃岐国内で浮上

(i) 宗吉瓦窯の出現

- ・ 妙音寺（讃岐最古の寺院：7世紀半ば建立）への瓦供給
- ・ 藤原宮南面大垣の瓦を生産・供給

「寺院建立」と「宮都造営」＝政権の意図を把握し、対応

瓦窯経営

窯の占地

原材料（粘土）、工人（瓦工や須恵器工人）、燃料（薪となる木材）の確保
輸送手段の確保（水運＜三野津湾から大和川へ＞、陸運＜国内各所＞の確保）
送り先との関係（同一主体、寺院経営者、藤原宮造営者＝国家との関係）

(ii) 猫坂古墓出土の青銅製骨蔵器

- ・ 火葬の実施（大化2年＜646年＞薄葬令、最初に火葬された天皇＝持統天皇）
- ・ 都風の青銅製骨蔵器

（類例）吉備真備の祖母（下道罔勝罔依母夫人）、威奈大村など

→政権（持統天皇周辺）に近い存在が類推

※(i)(ii)から、宮都とのつながりを持ち、7世紀の政権が示す施策の意図を把握した存在が、三野郡に存在していた。

※政権の施策を担いながら、文明化を進め、地域支配を進める地方豪族の姿

* 「壬申の功臣」和珥部臣君手か？

○その後の「わにべのおみ」の足跡

- ・ 平城京出土木簡に丸部氏（「讃岐国三野郡阿麻郷○丸部/宮目戸同丸部古君塩三斗」）
- ・ 宝亀2年（771年）、丸部臣豊球、私物をもって窮民20人以上を養う（『続日本紀』）
- ・ 嘉祥2年（849年）、丸部臣明麻呂、都への出仕から帰郷、三野郡大領へ。
→大領を老父に譲り、孝養をつくす（『続日本後紀』）

※都との関係をもちつつ、郡内で影響力をもつ。

（7世紀のスタンス＝政権施策を担い、地域支配を維持、を引き継ぐ。生き抜く豪族）

(4) 讃岐朝臣永直と惟宗朝臣直本

9世紀の人材爆発。明法博士の代表。讃岐びとの一つの到達点

○讃岐氏の進出

『続日本紀』延暦10年（791年）9月18日条（史料3）より

もとは星直氏（皇直氏）

6世紀末（敏達朝）国造任命、紗抜大押直（さぬきおおしのあたえ・讃岐凡直）氏に

670年の「庚午年籍」で、「大押直」→「凡直」：讃岐直氏と凡直氏で混乱

凡直千継らに「讃岐公」を賜う = 讃岐公千継（さぬきのきみ ちつぐ）

以後、千繼の系統は、讃岐公氏→讃岐朝臣氏として、中央法曹界に食い込む
※本貫地である讃岐国内にも凡直氏や讃岐公氏が存在：一族総出の移貫ではない!!
※都に進出した讃岐国の凡氏に、大安寺の僧・戒明が存在

* 讃岐公千繼：勘解由使次官となり、『延暦交替式』を編纂
(長官は菅野真道、次官は和氣広世)

○讃岐朝臣永直 (=律令の宗師)

『日本三代実録』貞観4年(862年)8月是月条 卒伝(80歳) (史料4)
(延暦2年<783年>誕生)

天長7年(830年)に明法博士(48歳)→以後18年間務める。

承和13年(846年)、法隆寺善愷事件。嘉祥元年(848年)連座、佐渡配流

斉衡2年(885年)、明法博士復歸

養老令の公定解釈書『令義解』(天長10年完成)の編纂に参加

律令解釈において「讃説」と呼ばれる学派を確立

○惟宗朝臣直本

もとは、讃岐国香川郡の秦公氏

元慶元年(877年)12月25日、讃岐国香河郡人秦公直宗、弟直本、本拠を左京六条に

元慶7年(883年)12月25日、秦公直宗、…秦公直本…、惟宗朝臣氏を賜う

以後、惟宗氏は、明法博士を歴任、法曹官僚として政府に食い込んでいく

※貞観年間(惟宗直本<当時は秦公直本>)に、公定注釈書『令義解』をはじめとする
様々な令についての解釈を集成した『令集解』を編纂

◎支配制度である律令制を受け入れ、自己のものにし、自らの支配・経営のツールとして
きた讃岐びとたちは、その能力をもって、国家の運営や実務の担い手として、食い込んで
いく。

3 古代讃岐の潜在力について

- ・ 讃岐びとたちを輩出した、古代讃岐がもっていた潜在力を紹介
- ・ 経済、文化、政治の側面からみていく

[経済面] (10世紀に編纂された百科事典『和名類聚抄』の記載から)

田数(田の面積) 18,647丁5段266歩：全国13位

陸奥・常陸・武蔵・近江・上野・信濃・下野・下総・出羽・肥後

上総・播磨・讃岐・筑前・伊勢・越中・大和・越後・美濃・肥前

※ 遠国を除外すると、近江—播磨—讃岐—伊勢—越中—大和—美濃

※ 10世紀の田数は、全国の中で非常に大きい国

人口 20万人または28万人（菅原道真『菅家文草』より）

※8世紀末～9世紀初めの全国人口＝600万人前後（鎌田元一説）

→ 28万／600万＝4.67%

※他国の比較：出挙本稻と課丁数の比例関係を利用（澤田吾一説）

→讃岐103,900人、全国600～700万人

出挙本稻 884,500束：全国15位

陸奥・常陸・肥後・美作・播磨・近江・下野・上総・越前・下総

武蔵・備前・出羽・信濃・讃岐・上野・伊勢・美濃・相模・越中

※ 遠国を除外すると、美作—播磨—近江—越前—備前—讃岐—伊勢—美濃

※ 課丁数との比例関係で考えれば、人口全国15位か—

◎10世紀までに開発が進み、人口や経済規模も、畿内周辺では有数

[文化面（仏教の受容からみる）]

古代寺院：28官寺（『菅家文草』、東寺百合文書）→四国、南海道最多

出身僧侶：『元亨釈書』（鎌倉時代の仏教書。高僧の伝記含む）の記述から抜き出し

京＝32、大和＝14、讃岐＝12、河内＝10、近江＝8…

◎寺院のインフラ整備（←経済的バックアップ）と、継続する人材輩出

◎先進かつ施策に沿った文化に対するキャッチと迅速な受容

[政治的な評価]

参議任国（政府高官である参議が、国司（国守）を兼任することを指す）

→原則、遥任国司となり、「受領」は別の者になる

『公卿補任』から事例抽出（土田直鎮「公卿補任を通じて見た諸国の格付け」）

[宇多～安徳期] 近江79、伊予68、備前64、讃岐55、備中47、美作43

[大宝～仁和] 近江32、讃岐13、播磨11、伊予11、美作10、武蔵10

○公卿の前歴としての国司事例（公卿へのステップとしての国司任官）

伊予48、播磨46、近江45、備中37、讃岐35、美作33、備前31…

◎行政上重要視される格付けの国、一方、公卿への手当としての国という側面も

◎近国の経済的優位な諸国とほぼ一致

能吏国司の赴任

安倍興行（878～880年）→藤原保則（882～885年）→菅原道真（886～890年）

讃岐国司ののちは、宇多天皇の政策ブレーンに

→寛平の治～延喜の国制改革へ

※10世紀の転換の青写真は、讃岐国での経験となる。

＝国政の縮図としての讃岐国、讃岐国での実験から国制へ ←政府の意識

◎実験成果を取り入れていったか？（白頭翁のしたたかさ）

4 おわりに

古代に作られた制度、枠組み、心性（→現代に生き残っている）

古代という時代を生き抜いてきた讃岐びとたちの蓄積の上に、現代がある。

【予告】

◎特別展「讃岐びと、時代を動かす一地方豪族が見た古代世界一」

→10月7日（土）～11月26日（日）

【予告2】

次回、第2回めの講座は、8月20日（日）